

脳卒中や頭部外傷などで意識障害が残った患者を介護していたり、ターミナル(終末)期にある患者と意志の疎通が十分に図れなく、困っている家族はいますか。

最愛の家族と会話による意志の疎通が図れなくなることは、大変つらいことと思います。しかし一方で、患者自身も一刻も早く意識障害から回復しようと、全身から懸命にメッセージを発しています。

私たち教員は学生と一緒に病院へ実習に行きます。学生は意識障害のある患者を受け持ち、それは親身にお世話をします。学生たちのひたむきな関わりを見ていて気が付くことは、教員の声などよりは、毎回優しく声掛けをして、寝衣交換などのお世話にあたる学生の声の方に確実に反応しているという事実です。

受け持ちを始めて数日たつと、うとうとと半覚醒状

態の患者でも、学生のたゆまぬ明るい声掛けに、ぱつと開眼することが多くなります。また、じつと視線を固定することが難しい患者

が、一瞬でも視線を学生の方へ向けようと必死になります。さらに、目を開けることすら難しい患者であっても、まぶたがびくびくする様子が見受けられる場合があります。

これらから考えられることは、「お世話する側の心のもつたメッセージは必ず患者に届いている」ということです。

では、視線や言葉で気持ちを伝えられない患者は、どのように最愛の家族にメッセージを伝えているのでしょうか。例えば、口元を見てください。安心できる人がそばにいるときは、口元がかすかに緩んでいます。家族がそばにいるときの患者の表情は、私たち看護師にみせる表情とは異なるや

さしい顔です。

もしも大切な方が心電図モニターを装着していると、画面に映し出される波形に注目してください。

心臓のリズムや呼吸のリズムを表す波形は、家族の聞き慣れた声が入っていると、ゆっくりと規則的なリズムに変化し、「安心して過ごせていますよ」と全身で伝えていくのです。

一方で、意識を失って深い眠りにについているように見えても、聴覚だけは、どんなときにも最後まで機能しています。悲しい話題が聞けると、心拍数が多くなったり心電図モニターの波形の基線が揺らぐなど、画面に患者自身の動揺が表れます。聴覚のことを忘れずに患者と接してください。

あなたの思いを伝えたいときには、患者の手を握り、耳元で「そばにいますからね」と話しかけてください。意識障害がある方にとって

は、励ましやねぎらいなどの心への栄養は、体の栄養以上に大変重要です。回復を願って応援していること、言葉で会話ができなくても大事な存在であること、それから、その方の闘病の軌跡を忘れないことを、手を握りながら語りかけてください。目の動きや表情、心臓のリズム、呼吸リズムなどを通じて、懸命に応答しているでしょう。患者のメッセージを感じ取ってください。

日常生活のお世話を治療の一形態と見なして、心地よさや喜びなどの刺激を提供しながら患者に内在する自然治癒力を最大限に引き出すのが看護師の役割であり、自然治癒力増強に向けた生活支援の方法論を学問的に体系化するのが看護学です。私たちは意識障害がある患者から得た学びを、奇跡ではなく科学的技法として普及できるように努力していきます。



名寄市立大学短期大学部児童学科 卒業公演

市立大学短期大学部児童学科の2年生が毎年行う「卒業公演」が今年も開催されます。演目は「リンゴがたべたいねずみくん」と「アレクサンダとぜんまいねずみ」の2本立て。

平成27年までは市民会館大ホールで開催されていましたが、今回からは市民文化センターE・N・RAYホールで開催されます。小さなお子さまのいるご家庭はもちろん、ご家族ご友人お誘い合わせのうえ、学生たちの2年間の集大成をぜひご覧ください。

とき 2月21日(日) 開場13:00 開演13:30
ところ 市民文化センターE・N・RAYホール
入場料 無料 (直接会場までお越しください)
問い合わせ 市立大学短期大学部児童学科

☎01654②4194



▲昨年の卒業公演のようす